

過疎地域の活性化をめざして

— 錦江町モデルの構築と「逞しい女性」の育成 —

平国美佐喜・中村 民恵

1. はじめに

平成25年過疎化に悩む錦江町から、同町公認マスコットキャラクター「でんしろう」の周りを固める妹分「くわがたガールズ」の衣装デザインを依頼され、生活学科生活学専攻現代ビジネスコースの学生が衣装制作に携わった。それを契機に学園祭における錦江町の特産品の販売、自治体共催「半島隅くじら元気市」物産展での特産品販売支援、農業体験「純心水田プロジェクト」などの取組みをとおして錦江町のPR活動に参加してきた。

平成26年3月これらの取組みをさらに全学的かつ組織的に展開することを視野に入れて、鹿児島純心女子短期大学（以下本学）と鹿児島県の大隅半島の中南部に位置する錦江町との間で「包括的連携協定」を締結し、本学の教育・研究資源を活用して、錦江町が目指す町の振興・活性化の事業を全学的・組織的に支援することとした。

本学は過疎地域の活性化事業をとおして地域社会との交流体験に根ざした体験重視の教育及び社会貢献活動の機会を学生に提供し、さらに企業等が求めている課題発見・解決能力等の高度な就業力を備えた「逞しい女性」の育成を目指すことを目的とする。

本論は、平成27年6月に開催された日本ビジネス実務学会において、多様な地域連携の試みの一例として発表した実践事例活動報告の内容に追記し論じたものである。

2. 「くわがたガールズ」の衣装デザインと制作

平成25年錦江町からの依頼により、生活学科生活学専攻現代ビジネス

コースの学生が「くわがたガールズ」の衣装を制作することになった。6月に依頼があり10月の学園祭の舞台発表において新作をお披露目するという目標を立てた。制作活動は授業以外の時間に「地域貢献プロデュース」として、メンバー13名で取り組んだ。

新しい衣装を制作するにあたって、錦江町役場の方々とは何回も打ち合わせを行った。新衣装についての錦江町からの要望は「くわがたの特徴を醸し出すこと」、「かわいらしく、子供たちが憧れる衣装にすること」、デザインとして「大腿部の絶対領域が確保されていること」などであった。さらに衣装を着用する「くわがたガールズ」のメンバーは錦江町の住民ボランティアで、メンバーが固定されていないため、サイズ調整できるデザインにすることが制作の条件とされた。(制作過程については本学紀要第45号Gプロジェクト2013を参照されたい。)

この活動は学生に授業で学んだことを実践する機会を与えたばかりではなく、地域の活性化に役に立っているという社会貢献への意識づけを与える結果となった。

3. 地域貢献プロデュース

3.1 純心水田プロジェクト

平成27年度より生活学科生活学専攻現代ビジネスコースに「地域貢献プロデュース」を演習科目として新設するに先駆け、平成26年3月に純心水田プロジェクトを課外活動として立ち上げた。全学生に呼びかけ、延べ43名の教職員と学生(卒業生を含む)が週末を利用して錦江町を訪れ、もち米の田植えから収穫までの一連の作業に参加した。錦江町の方々、実際の作業のプロセスを丁寧に指導して下さった。作業後の昼食時間はもちろんのこと、コンバイン乗車体験や案山子作り、たけのこ掘り体験など毎回多くの時間を共有することで、地域の方々との信頼関係を築いた。

また10月には純心水田で収穫したもち米を用いて、錦江町とのコラボレーション商品「でん福餅」の商品化に取り組んだ。学生がモニターとなり、錦江町の菓子屋2店舗の試作品10種類の餡の中から「いちごあん」とクリームチーズ」「抹茶あん」と小豆クリーム」「ミニトマトとクリームチーズ」「紫いもと生クリーム」の4種類に絞り販売することになった。

過疎地域の活性化をめざして

商品名は、でんしろうの「でん」と純心水田の「でん」をかけあわせ、～幸福を呼ぶ～「でん福餅」と学生が名付けた。学園祭での商品販売を皮切りに錦江町のイベント等での販売等、学生は地域を取り巻く課題に積極的に参加していることを実感できた。

地元の方々との協働作業をとおして、実際に存在する過疎地域の課題に向き合い、座学の授業とは異なる達成感を味わうことができた。このことが学生のモチベーションとなり、次への新たな発想を生み出す力を育成することにつながる。

平成26年度・27年度 純心水田プロジェクト実施状況

純心水田プロジェクト	参加者	田植え	田車押し	稲刈り		
平成26年度	学生	6月	16名	7月	10月	/
	教職員		3名			
平成27年度	学生	4月	19名 卒業生1名	5月	8月	36名
	教職員		4名			



純心水田プロジェクト

3.2 マルシェプロジェクト（販売実習）

平成25年度から学園祭で錦江町のブースを設置し、特産品販売を錦江

想林第7号

町の方々と共に学生が行っている。販売活動をとおして錦江町の方々と交流する絶好の機会となっている。さらに秋には錦江町のイベントである「秋祭り」にも学生が参加し、町民の方々と交流を深めている。

平成27年2月28日と3月1日に鹿児島市で開催された自治体共催「半島すん隔くじら元気市」で錦江町の方々と14名の学生（卒業生を含む）が特産品販売を行なった。お客様と直接会話と交わしながら商品を販売しなければならないので、学生は常に能動的に考え行動に移さなければならない。授業で習得したビジネスマナーや知識を実践の場で活用することで、知識習得の必要性を認識することもできた。また、錦江町のスタッフの方々との協働作業をとおし、全体の仕事の流れと自分が担当する仕事のつながりを意識し、組織で仕事をするこの意味を学ぶことができた。

平成26年・27年 半島すん隔くじら元気市実施状況

月 日	活動内容	活動参加者
平成26年 3月1日(土) 3月2日(日)	販売スタッフ	学生参加者数→ 17名
平成27年 2月28日(土) 3月1日(日)		学生参加者数→ 11名 卒業生 → 3名

平成26年・27年 錦江町秋まつり実施状況

月 日	活動内容	活動参加者
平成26年 11月9日(日)	販売スタッフ	学生参加者数→ 3名 卒業生 → 2名 教職員 → 2名
平成27年 11月8日(日)		学生参加者数→ 5名 教職員 → 1名

過疎地域の活性化をめざして

平成26年・27年 紫原あったか市実施状況

月 日	活動内容	活動参加者
平成26年 2月16日(日)	販売スタッフ	学生参加者数→ 5名
平成27年 2月15日(日)		学生参加者数→ 7名



マルシェプロジェクト

3.3 PRプロジェクト（おはら祭への参加）

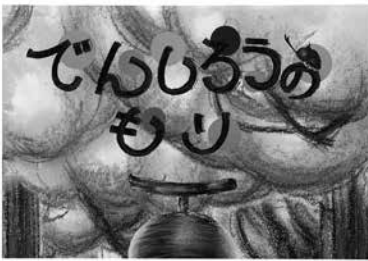
毎年11月2日と3日に開催されるおはら祭は南九州最大の祭りであり、地域貢献の一環として本学も踊り連に参加している。平成25年度から錦江町のマスコットキャラクター「でんしろう」と本学学生と一緒に「鹿児島純心女子短期大学地域貢献プロデュース」踊り連として参加し、錦江町のPR活動に一役買っている。学生が主体となって春休みからスケジュール調整・管理、練習場所の設定、踊りの指導者との連絡等、企画運営に取り組んだ。課外時間を利用して練習に励み、本番では息の合った踊りを披露することができた。

平成26年・27年 おはら祭実施状況(地域貢献プロデュース踊り連も含む)

月 日	学生参加者数	教職員参加者数	錦江町参加者数
平成26年11月3日	226名	28名	3名
平成27年11月3日	288名	23名	3名

4. 地域志向科目「絵本の世界」

平成26年こども学専攻2年後期必修科目「絵本の世界」で錦江町から依頼された児童向けの「錦江町の紹介絵本」制作に取り組んだ。グループ毎に企画を考え、その中から優秀な作品を選び、文章、挿絵まですべて学生が主体となって絵本「でんしろうのもり」を完成させた。平成27年7月には、卒業生が勤務する鹿児島市内の幼稚園を錦江町の方と「でんしろう」が訪れ贈呈式を行った。また、絵本300冊が市立幼稚園協会を通して、錦江町から鹿児島市内の幼稚園に配布された。



絵本の表紙



製作の様子

5. 教育効果

平成26年度は地域貢献プロデュースに課外活動として延べ100名を超える学生が参加し、数名の教員がアドバイザーとして加わった。そのため数値で評価を測定することはしなかった。しかし、学生は1年間の活動の報告、振り返り、気づき、改善点等をまとめ、自己の課題や成長を確認するようにしている。(本学紀要第45号、46号を参考されたい。) また、平成26年度学内卒業研究発表会で1年間の成果としてグループの代表が活動内容について発表した。学生の発表レポートによると、地理的にも遠い錦江町役場の方を含めた関係者との日程調整、会議をスムーズに進めるための資料作成など事前の準備が重要であること、打ち合わせた内容を議事録に残すことは、会議に出席した人だけでなく、都合により欠席した人と共通認識を持つために必要であることなど、今までにない気づきがあったとの報告があった。また、SNSやメールだけでは伝わりにくい情報は、自主的に学生同士でミーティングを実施し、確実な情報共有に努めたとの報告もあった。学生たちは過疎地域活性化のため

過疎地域の活性化をめざして

に熱心に業務に取り組む錦江町の方々との協働活動をとoshi、相互の信頼関係を築くことができ、それにより地域活性化の一員であるという意識が芽生え、能動的に役割に応じた行動が出来るようになってきたと思われる。

錦江町からの報告によると、純心水田の存在は、単に米の栽培ばかりではなく、高齢化の進む集落に「元気と笑顔」を与える効果もあり、この取り組みがメディアに取り上げられたことで、地区外からも案山子の見学や問い合わせなどが多くあり、錦江町のPRや情報発信に大きな効果があったとのことだった。本学学生の若い力が地域住民に活力を与え、心理的な元気を与えることも地域を活性化する様々な施策を引き出すとのことである。

学生の自己評価、錦江町の評価、教員の評価から学習効果を検証すると、今後地域貢献プロデュースの取組みを工夫改善しながら深化させることで、錦江町の活性化に新しい活力を与えると同時に、企画力、創造力、課題発見・解決能力等の企業から求められる発展的な就業力を備えた「逞しい女性」を育成するために有益な教育方法のひとつになり得ると確信できる。

また、人材育成の成果として、平成27年4月錦江町初の地域おこし協力隊として、生活学科生活学専攻生活クリエイトコースの迫田ひかるさんが採用され錦江町役場企画課に勤務している。錦江町と本学が連携して多彩な企画に取り組むためのパイプ役として期待する。

6. まとめ

錦江町と本学はフェリーと車を利用して約2時間移動に時間がかかる。連携協定を結びはしたが、はたして効果的な取組みになるのか正直不安なところもあった。ところが、希望者のみにも関わらず多くの学生が地域社会との交流に積極的に参加した。そして卒業後もボランティアで活動に参加したり、またプライベートで錦江町を観光で訪れるなど少なからず交流人口増加に寄与しているようだ。

過疎地域の活性化という観点から、今後は地域志向科目の拡大・深化と新設によって学生の地域社会との交流体験の密度を高め、全学生が受講できるような履修モデルづくりを進めていきたい。その手始めとし

て、平成27年度より開設した生活学科生活学専攻現代ビジネスコースの「地域貢献プロデュース」がある。明確な目標設定のもと効果的な教育・評価システムを構築することに取り組むたい。こども学専攻では学生たちが作成した絵本「でんしろのもり」を「絵本の読み聞かせ」の授業で教材として活用し、食物栄養専攻「調理学実習」では錦江町の米などの特産品を活用したレシピの提案に取り組む予定である。また、この取り組みが過疎地域にどのような良い波及効果があり変化をもたらすのかを実証的に調査するとともに、「外部評価委員会」を設置し、外部の評価を受ける体制も整えた。

今後は錦江町から提案されたプロジェクトに参加させてもらうのではなく、学生が地域活性化の主体者のひとりとして課題を発見し、女子学生の若い力と感性、知識を地域の中で発揮できるような活動を模索していきながら、所期の目的である過疎地域活性化の「錦江町モデル」を構築、そして課題発見・解決能力等の高度な就業力を備えた「逞しい女性」の育成を目指していきたい。

謝辞

本学との取り組みに対して深いご理解と惜しみないご協力をいただいた錦江町役場および錦江町の方々に深謝する。また、「地域貢献プロデュース」新設に伴い準備段階から学生の指導にご尽力いただいた生活学科生活学専攻現代ビジネスコース森永初代先生をはじめコースの先生方に感謝する。

参考文献

1. 佐々木亘、森永初代、濱崎千鶴、中村民恵、末永勝征、(2015)、Gプロジェクト2013、鹿児島純心女子短期大学 研究紀要第45号
2. 佐々木亘、森永初代、濱崎千鶴、中村民恵、末永勝征、(2016)、Gプロジェクト2014、鹿児島純心女子短期大学 研究紀要第46号

平国美佐喜（鹿児島純心女子短期大学教授）
中村民恵（鹿児島純心女子短期大学准教授）